

【学齢期から思春期への変化】

～思春期に起きる変化～

こころも体も大きく成長し始める小学校高学年頃から思春期にかけて、発達障害のある子どもたちにはさまざまな変化が訪れます。

- ・聞いて理解することや他者とのコミュニケーションの苦手さから悩みが生じる
- ・社会性の乏しさゆえに周囲に合わせたり協調したりすることが難しく、悪意はないものの身勝手にみられてしまう
- ・年齢相応に求められる振る舞いが分からず、浮いてしまう
- ・人と違うということに悩み劣等感を感じたり、悲観的になったり、イライラしやすくなったり、無力感を感じてしまう
- ・友だちと同じように活動することができず、それを自分の欠点だと考えてしまい自信をなくす

発達障害の子どもたちは環境の変化に柔軟に対応することが苦手なので、クラス替えや進学、部活動に戸惑い、不安を募らせ、怖くて学校に行けなくなったり、自宅に引きこもってしまうこともあります。

【就労のためにできること】

発達障害であっても、一人で生活し、仕事を持ち、充実した人生を送っている人はたくさんいます。ただし、大人になれば自然に自立した生活を送れるというわけではありません。また、学校の勉強がよくできても、仕事に必要なことはそれだけではありません。社会においては、学生時代よりもさらに複雑な社会的スキルが要求されるのです。社会人として仕事に就き、働き続けるためには、自分の特性を知り、社会に適応する力を養う必要があります。

発達障害のある人の中には、知的な能力は高いものの、次のような働きにくい点の当たり前のことが意識できずに困っているというをよく聞きます。

- ・複数の他者と一緒に過剰に、適度に付き合う
- ・身だしなみや整理整頓をする
- ・あいさつや返事などをする
- ・職場のルールや習慣を理解し、守る
- ・急な予定変更などに対応する

発達障害のある人たちは、特性ゆ

また、自分を変えようとして無理をしたり、良くないところを一気に直そうと考えてしまうと、かえって失敗体験が増えてより深く傷ついてしまうことがあります。

特性によるつまづきや放置されたまま適切な支援を受けられないと、こころのバランスを失って二次的な問題（体調不良、精神疾患、非行や暴力、リストカット、過食など）に苦しむことにもなります。しかし、いずれも適切な支援があれば防ぐことや軽減していくことができます。

～解決のために大切なこと～

義務教育の中では、子ども一人ひとりのニーズに合わせた適切な指導や支援を目的に「特別支援教育」が実施されています。学業面だけでなく、対人関係や生活面での様子を踏まえて、子どもに合った学べる環境を選ぶことができます。

発達障害の子どもたちは、環境を整えば見違えるように力を発揮することも多いのです。通常学級にこだわらず、子どもが落ち着いて過ごせる学びの場を選ぶことも大切なことです。まずは、担任の先生に相談してみましよう。

そのほか、美作保健所や医療機関

【漢字が覚えられないCくん】

小学校高学年になった今も、低学年で習った漢字が覚えられません。書こうとすると違った漢字を書いたり、形がなかなか覚えられません。本人は困っているものの、先生や家族からは「ちゃんと練習しないからだ」と言われ、悩んでいます。



えに社会的スキルを身につけることは簡単ではありません。そのため、早いうちから少しずつ就労に向けて準備する必要があります。

例えば、子どものころからお小遣いの管理や掃除、洗濯など、時間がかかっても自分で何でもやってみることで、何が難しいのか、どんな工夫があるのかなど、気づくことができます。その積み重ねが将来につながるのです。

～広がる就労のための支援～

職場への適応ができるように支援してくれるジョブコーチという制度があります。特性に応じた支援や職場内の環境を整えてくれる役割を担い、地域障害者職業センターなどを通じて一定期間派遣され支援してくれる制度です。そのほか、学校の進路指導における担任教師、おやかま発達障害者支援センター、障害福祉課（☎32・2067、☎32・215

療育機関、学校教育課、おやかま発達障害者支援センターなどで、相談を受けています。解決のためには、家族だけで悩まずに専門機関へ相談してみましよう。子どもにどのような特性があるのかを確認したうえで、具体的にどのような支援が必要なのかを一緒に考えることができます。伸ばすべき長所や能力がみえてくるとともに、苦手なことも工夫次第で理解できたり、習得がスムーズになったりすることもあります。

【できない自分に落ち込んでるBくん】

もともと国語が苦手なBくんですが、中学に入ってからそれが顕著に。先生からの質問が複雑で理解できず、いつも見当違いの回答をします。歴史は得意で先生よりも詳しいため、国語での珍回答はふざけているのだと誤解されています。話言葉の理解に困難を抱えていることに本人も周囲も気づいていないため、できない自分に戻ります落ち込んでしまします。

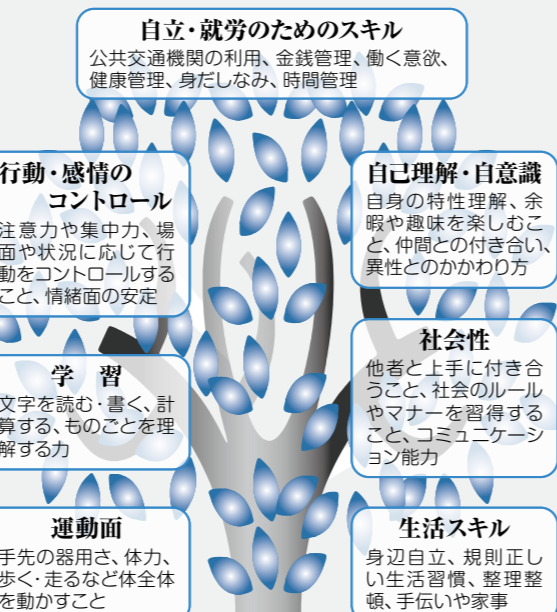


おやかま発達障害者支援センター 県北支所 臨床心理士 池内 豊さん



「本人と家族、支援者の相談窓口」「発達障害のある人が生活する地域の支援体制整備」という二本立てで支援しています。学齢期には「学習に集中できない」「学校に行きにくい」といった相談や高校卒業後の進路についての相談を受けることがあります。普段の本人の様子をよく知っている家族や学校の先生とともに相談し、場合によっては市の学校教育課、津山教育事務所と連携して支援します。就労期には「働きたい」「就職できたけど続かなかった」などの相談があります。特性や問題に応じて「どういった準備を」「どこ」でするのが最もよいのか、本人や家族と相談しながら考えます。就労や自立のスタイルは人によってさまざま。本人にとって一番いい答えを見つければいいですね。就労セミナーで発達障害のある人が「一番応援してくれるのは家族」と話してくれたことがあります。本人と家族が程よい距離感で協力関係を築き、目の前の課題に取り組めるようにバックアップしていきたいです。県北支所が平成20年6月に開設されたので、来所していただきやすくなっています。身近で支援してくれる人や関係機関と連携し、個々に応じた支援をしていくので、お気軽にご相談ください。お問い合わせ先 おやかま発達障害者支援センター 県北支所（津山教育事務所内、田町）☎22-1717 ※まずは電話で相談を受け付けます

身につけたいことや成長に応じた課題



3) などでも、就労の相談を受けています。

【おやかまの地域づくり】

すべての人は、いろいろな個性と可能性を持って生まれてきます。発達障害も、そうした生まれながらの個性や可能性のあり方の一つで、理解者に恵まれれば周囲の人と調和して暮らしていくことができます。発達障害のある人もない人も、すべての人がお互いを思いやる心をもつことで、温もりのある豊かな地域生活が送れるのではないのでしょうか。

【うっかりが多く、おしゃべりが止まらないDさん】

大事な仕事の予定をうっかり忘れて、大切な書類を置いたままにすることがあります。周りの人にはあきれられ、本人も悪いことは分かっていますが、同じことを繰り返してしまいます。雑談に夢中になると、その場の状況とは関係なくおしゃべりが多くなり、口が止まらないことがあります。しかし、気配りはよくできて、困っている人がいたりすればいち早く気がつき、手助けしてあげるDさんです。

お問い合わせ先 療育センター（津山すこやか・こどもセンター）☎32・2174